

中欧2012年夏

渡辺 肇

倉敷芸術科学大学産業科学技術学部

(2012年10月1日 受理)

1) 「オーストリア『皇太子』の日本訪問」刊行と関係者への贈呈

「オーストリア『皇太子』の日本訪問」については7年にわたり当紀要に発表してきたが、それらを纏めた書籍が昨年10月17日に遂に刊行された。これは1914年6月28日にサラエヴォで暗殺されたハプスブルク帝国の皇位継承者フランツ・フェルディナント親王の訪日日記を和訳したものである。

フランツ・フェルディナント親王はハプスブルク家の家法を無視して、1国を統治している王家の娘とではなく、ただの伯爵の娘と身分違いの結婚をした為に、ハプスブルク家の家長たる皇帝になる身でありながら、妻と子供たちはハプスブルク家の一員にはなれず、したがって皇族にはなれなかった。ハプスブルク家の人たちは、死後はウィーンのカプチーナ教会地下のハプスブルク家の皇室墓所に葬られる事になっていたが、フランツ・フェルディナント親王の妻子には、それが許されずフランツ・フェルディナント親王だけが一人寂しくそこに眠るしかなかった。フランツ・フェルディナント親王はそれを拒み、皇室墓所ではなく、ウィーンの西方100km程のヴァッハウ渓谷に位置するアートシュテッテン城に、あらかじめ、自分と妻の墓所を用意していた。暗殺された2人の遺体は現在その墓所に眠っている。

1918年の革命でハプスブルク家の資産は総て国家に没収されてしまったが、フランツ・フェルディナント親王の子孫はハプスブルク家の一員ではなく、新しく創設されたホーエンベルク家に属した為に、アートシュテッテン城は家族の所有物として残った。現在のアートシュテッテン城主はフランツ・フェルディナント親王の曾孫である。孫の代で男系が途絶したので、女性が城主でこの城に居住している。城の一部を「皇位継承者フランツ・フェルディナント親王博物館」として一般に公開している。

筆者がこの日記の和訳を始めた際にこの城に城主のホーエンベルク女^{フェルステン}候を訪問し、和訳の開始を報告し、資料等の助けを御願した。昨秋に翻訳は完成し、刊行されたが、単に郵送するだけでは不十分なので、是非、女候に手渡ししたいと思いアートシュテッテン城を訪問し



図1. 拙著を持つ女候と筆者の記念写真

た。女候は和訳書を受取り非常に喜んでくれた。女候は御礼にと自ら緑茶を入れてくれた。また、執事に命じて公開されていない城内居室も総て参観させてくれた。お城の規模はヴェルサイユ宮殿やシェンブルン宮殿とは比較すべくもないが、内部は華麗を極め、ハプスブルク家の諸皇帝・皇妃の肖像画で溢れていた。参観を終えると女候は自ら自動車^{あふ}を運転し筆者を近くの鉄道の駅にまで送ってくれた。日本語訳の完成が余程嬉しかったのであろう。

ウィーンではアイヒェルブルク教授を訪問した。教授はオーストリア史の史料編纂が専門で、若い頃25年間、アートシュテッテン城内に300㎡のアパートを与えられ週3～4泊し古文書の整理に当たり、「皇位継承者フランツ・フェルディナント親王博物館」の設立に貢献すると同時にフランツ・フェルディナント親王やオーストリアの歴史に関する多数の書物を著わした人物である。筆者も教授の著作を多数引用

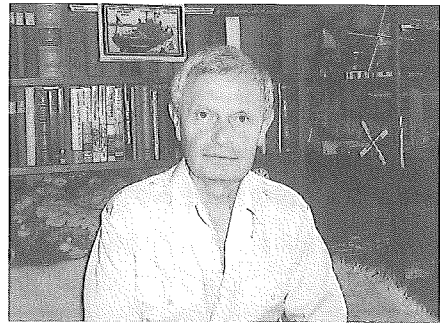


図2. アイヒェルブルク教授

させて頂いた。教授は伯爵家の当主でもあり、曾祖父の伯爵がフランツ・フェルディナント親王の個人教師でもあった人だ。定年で引退されて居たので、私宅を訪問させて頂いた。学者らしく書籍に囲まれて暮らして居られた。拙著を非常に喜んでくれた。

2) ペーター・パンツァー教授との出会

ウィーンの陸軍歴史博物館には1914年6月28日にサラエヴォで夫人と共に暗殺されたハプスブルク帝国の皇位継承者フランツ・フェルディナント親王が暗殺された際に着用していた血染の軍服と乗車していた数発の弾痕が残る自動車が展示されている。筆者はウィーンを訪問する度に一度は訪れる。世界史を変えた衝撃を追体験する為である。今年は9月16日(日)に訪問した。

博物館の内部に1枚のポスターが貼られていた。9月18日(火)19:00より埴日協会の主催で「ハプスブルク帝国海軍と日本-1869年～1918年」と言う講演会が開催されるとあった。筆者は9月19日(水)帰国する予定となっていて、その前日の18日(火)19:00にはオペレッタの殿堂と言われるウィーン・フォルクスオーパーでシュトラウスの「こうもり」を見てヨーロッパ最後の夜を過ごす予定であった。既に現役を引退している筆者旧知のルードルフ・ビーブル教授が特別に指揮し、演出や舞台



図3. 埴日協会主催講演会開催のピラ

装置も現行のものではなく、筆者には懐かしい昔のものでやる事となっていた。しかも、筆者の席は 1 列目の真中で指揮者の真後ろの最上の席である。従って、予定通りオペレッタに行く気であった。

しかも講演の内容については筆者が殆ど知っている事でもあったので、オペレッタ訪問の予定を変える気は全くなかった。ところが、講師の名前を見て方針を変えた。ペーター・パンツァー教授の名前であったからだ。パンツァー教授はオーストリアのザルツブルクで筆者より 1 年早い 1942 年に生れ、ウィーン大学日本学科で博士号を取得し、ウィーン大学助手、助教授を務めたが、1988 年、当時西独の首府にあったボン大学から日本学の教授として招聘され、65 歳で定年となった 2008 年まで教授を務め、定年退職し名誉教授の称号を与えられた有名な日本学者であり、ボン独日協会長も務めたので、2007 年に旭日中授章も授与されている。日本語に翻訳された著作も多数ある。また岩波文庫で出ている久米邦武編の『米欧回覧実記』独訳も行っている。ボンまで足を延ばすのが面倒で、筆者がパンツァー教授の訾訾に接する機会が今まで無かった。その教授がウィーンで講演するのである。オペレッタはまた見る事が出来るだろうが、教授の話を聞く機会はもう無いかも知れない。急遽予定を変えて講演会に出席する事とした。

当日の 18 日、講演会は 19:00 開始なので、18:00 に都心のショッテン・トアーと言う停留所から終点の南駅行きの路面電車に乗って会場に向かった。筆者は一番後ろの席に座っていたが、ある停留所で一人の紳士が電車に乗り込んで来て、筆者のすぐ前の席に座った。筆者は以前パンツァー教授の写真を見た事があったのと、時間と場所から、その紳士がパンツァー教授である可能性があると思い、思い切って声を掛けてみた。「すいません、ひょっとするとパンツァー教授ではありませんか？」紳士はびっくりして「そうですが」と怪訝そうな顔をした。「私は日本の大学教授で渡辺といいます。最近、皇位継承者フランツ・フェルディナント親王の訪日日記を和訳して刊行したところです。パンツァー教授にも是非 1 冊差し上げたいが、手持が無い。日本から送るので名刺を下さい」と頼み名刺交換をした。住所を見るとボンではなくウィーンになっている。ボン大学定年後はウィーンに住んでいるという。電車が終点の南駅に到着してからも、会場の陸軍歴史博物館まで徒歩で 10 分弱、一緒に歩きながら、種々の話をした。

教授の講演は 19:00 に始まり、休なしにきっちり、21:00 まで続いた。聴衆は 100 名程だったが、日本人は筆者のみであった。大使館から大使か、文化担当者が出席しているのだろうと思ったのに、誰も来ていないのは不思議であった。教授は講演を始めるに当たって、「本日は遠い日本から渡辺教授が参加してくれてい

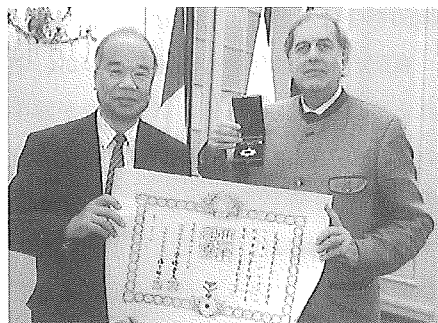


図 4. 國仲ボン総領事より旭日中授章を授与されるパンツァー教授

る。」更に誇張して「わざわざ、帰国を1日延ばして参列して頂いている」などと述べて、大サービスをしてくれた。講演のなかでも筆者の事に2～3回触れてくれた。講演会を選んだのは大成功であった。21:00からパーティとなった。筆者も最後まで居たかったが、翌日の帰国に備え荷造りの必要があったので、途中で退席しなければならず、若干残念であった。

3) パリ、ベルリン、ウィーンの三題^{ばなし} 噺

夏季には中欧諸国を歴訪する事としているが、旅程は通常フランスのパリから始めている。今回も8月5日に東京成田空港を立ちパリ CDG 空港に到着した。フランスは西欧の国ではあるが、小生にとっては中欧への入口である。通常ユーレイルパスという欧州周遊鉄道乗車券を購入して欧州諸国を移動している。

今夏も1ヶ月間の乗車券を買って、まず、パリからフランクフルトへ移動する事にした。8月7日にパリの東駅で8月12日 09:06 発列車の座席指定券を購入した。ユーレイルパスは使用開始前に開始日と最終日を記入し、駅で検印を受ける必要がある。今回も8月12日使用開始、9月11日を最終日と記入して貰い検印を受けようとした。ところが東駅窓口の係員は使用開始日と検印の日付は一致せねばならぬと主張し検印を拒否した。検印して欲しいのであれば使用開始日を8月7日にせよと言う。それでは8月7日から11日までの5日分が無駄になって仕舞う。それで、そんな馬鹿な話はない。昨年までは何時でも東駅の窓口で先付けの使用開始日で検印をして貰った。何か規則が変わったのか、その証拠を見せろと迫ったが、8月12日開始としたいのであれば、使用開始当日に窓口で検印を受けろと主張し続ける。

東駅の窓口は何時も混雑していて、朝早い時間でもあるので、下手をすると列車に乗遅れる事になる。それに、窓口係員が勝手な解釈をする権限は無い。規則が変わったのであれば、その書面を見せろ。さもなくば直ちに検印せよと迫ったが、書面も見せず、検印も拒否で、^{こうちゃく}膠着状態となった。議論を続けても無駄だ。それで相手に、上司を呼べと要求すると、係員に代わって上司が現れた。同じ議論を続けたが、上司の対応も、使用開始日を変更しようという人が多くて困るなどと、全く論理に欠けている。そのうち議論が1時間を超えてしまった。これ以上、説得を続けても無駄だと諦めて、窓口を去った。規則が変わったのか否かについては^{しゃくぜん}釈然としなかった。

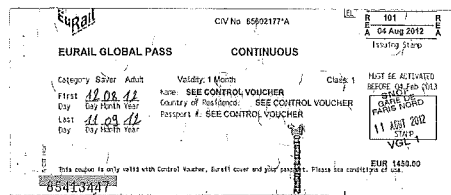


図5. ユーレイルパス

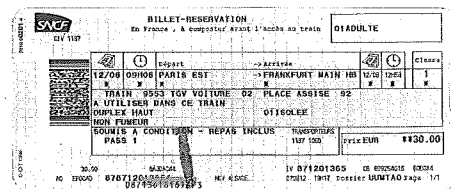


図6. パリよりフランクフルトへの座席指定券

4 日あとの 8 月 11 日に東駅の西隣に所在する北駅の窓口で検印を頼んだら、何の問題もなく 12 日使用開始と記入し、11 日付で検印してくれた。東駅で起こった事は一体何であったのか実に不可解である。

この様な不可解な事がパリだけではなく、ベルリンでも起こった。8 月 17 日鉄道でベルリンに入った。ベルリン市内で自由に行動する為に、国電、地下鉄、バス、路面電車に通用するベルリン市内 7 日間周遊券を購入しようとし、ベルリンの中心地の一つである国電アレクサンダー広場駅の窓口で購入し、代金の EUR 28.00 (約 2,800 円) を支払おうとしてクレジットカードを出した。そしたら、旅券を提示せよと言われた。以前に旅券を提示した記憶が無かったので、そういう規則が出来たのかと尋ねた。そうだと答えたので旅券を提示して、支払を終えた。1 週間後、同じ窓口で、また 7 日間周遊券を購入した。窓口の係員は前回とは違った人物だったが、旅券提示を要求される事もなくクレジットカードで支払いを終えた。何とも不思議であった。

ベルリンの後にウィーンに滞在した。金融を専門としているので、インターネットの記事だけでは足りず、日本経済新聞の国際版を講読して市場の動き等を観察している。ベルリンでは日本人の訪問者が減った^{せい}所為か、以前には何箇所かの売店で買えたのに、現在では購入が不可能となっている。パリとウィーンは日本人の訪問者が多いので、まだ購入が可能である。ウィーン西駅の売店で毎日日本経済新聞を購入した。オーストリアは欧州の奥地にある為に新聞代金が高い。独仏では 1 部 EUR 4.50 なのに、オーストリアでは EUR 5.00 だ。今回はユーロが暴落しているので、およそ 500 円だが、前回までは 700 円も 800 円もした。高い新聞だが、日本経済を見守る為には購読せざるを得ない。旅行中は現金を余り所持していないので、可能な限りクレジットカードで支払う。クレジットカードの悪用が多発している所以、最近のカードは IC チップ入のカードが多く、支払の際に署名する代わりに PIN (個人特定番号) を入力する。つまり、PIN を入力すれば署名は必要ないのだ。ところが、ウィーン西駅の売店では係員によって PIN と署名の両方を要求する。おかしいと言っても聞く耳をもたない。パリ、ベルリン、ウィーンに共通する点は「我輩が規則だ。」と頑張る人間が多い事だ。

以上がパリ、ベルリン、ウィーンの三題^{ぼなし}だ。

4) ベルリンの連邦省庁公開日

ベルリンでは連邦政府省庁の内部公開が 8 月第 3 週末に恒例化している。8 月 17 日の夜にベルリン入りしたのも、18 日 (土)、19 日 (日) の公開日に合わせてである。全部で 17 の省庁が公開される。大臣室等の建物内部の公開のみならず、数多くの行事が開催され、大臣も出てきて国民と対話する。2007 年には首相官邸と大蔵省、08 年には外務省と国防省、09 年には労働厚生省と食料・農業・消費者保護省、10 年には経済・科学技術省と建設・運輸・都市開発省、11 年には広報庁と内務省と 10 省庁の訪問を終えた。

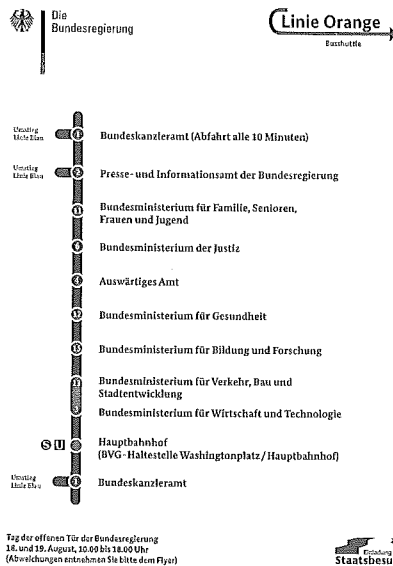


図7. 連邦政府庁舎訪問シャトル・バス運行経路図（オレンジ路線）

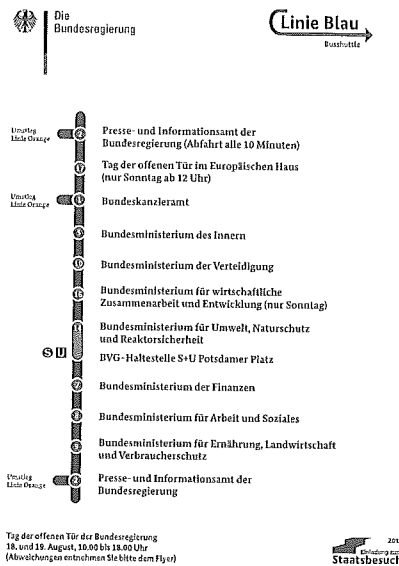


図8. 連邦政府庁舎訪問シャトル・バス運行路線図（ブルー路線）

全部で17省庁が公開されているので、残りは7省庁となった。建物を通り抜けるだけなら、2日で17省庁回れない事もないが、じっくりと腰を据えて参観し行事に参加し大臣たちと対話しようとする1日で1省庁しか回れない。しかし小生も今年は古希をむかえ、来年度定年だ。欧州に来られる機会も減るだろう。もう後が無いと思い、残りの7省庁は2日間で一気に回ろうと決意した。

18日(土)には、家族・高齢者・婦人・青年省、司法省、健康省の3省庁、19日(日)には、欧州会館(EUハウス)、経済協力開発省、教育・研究省、環境・自然保護・原子炉安全省を訪問したが、^{かけあし}駆足で動いた為に余り収穫は無かった。それでも司法省では女性のロイトイサー・シュナーレンベルガー大臣と死刑廃止論について議論できた。

今回訪問した省庁の建物は殆ど新築されたもので、歴史的意義のあるものは少なかったが、環境・自然保護・原子炉安全省の旧館には歴史があった。ヴィルヘルム街とライプチヒ街の周辺にプロイセン王国とドイツ帝国の官衙が集中していたが、ライプチヒ街に面していた^{かんが}プロイセン王国農務省のケーニッヒ・グレート街への増築が決定したのは1902年であったが、財政上の問題から起工は1913年となった。翌1914年に第1次世界大戦が始まったが、遅れはしたが、この建物は1916年には竣工した。



図9. 国民と交流するロイトイサー・シュナーレンベルガー司法大臣

1917 年には地階部分を店舗として貸付けた。第 2 次大戦での被害は軽微であった。ソ連占領地区であったので、1948 年にはベルリン消費生活協同組合の本部となった。1961 年にはベルリンの壁が建設されたので、この建物一帯は無人地帯となり、窓や建物の入口は総て閉鎖された。1990 年のドイツ統合後の 1991 年の秋には建物の修復が始まり、連邦環境省のベルリン庁舎となった。

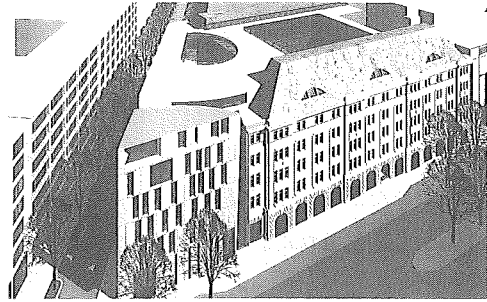


図10. 連邦環境省ベルリン庁舎

5) フリードリッヒ大王生誕300年

ドイツは今でも連邦国家で、中央集権国家ではなく、各邦の力が強い国である。ドイツの最初の統一国家である神聖ローマ帝国では皇帝の力が弱く、日本でいえば足利將軍の様であった。宗教改革に伴う 30 年戦争は 1648 年のウェストファーレン条約で収束したが、その結果、ドイツ諸侯の領邦国家に主権が認められたので、神聖ローマ皇帝の統治力は益々弱体化した。最強の領邦国家は皇帝の出身地オーストリアでハプスブルク家に属していた。オーストリアに対抗する有力領邦国家は軍国主義の代名詞ともいえるプロイセン王国であった。1740 年皇帝カール 6 世が死亡し、ハプスブルク家の男系が絶えた。カール 6 世は生前に国事詔書を発し、娘のマリア・テレージアに家督を相続させようとした。この女系相続に異を唱える者はなかったのだが、皇帝が死亡するや否や、プロイセンのフリードリッヒ 2 世は直ちに兵を動かし、オーストリア領で豊穡の地であったシュレージエンの大部分を占領してしまった。マリア・テレージアも必死の抵抗を行ったのであったが、最終的にはプロイセンに割譲されてしまった。

フリードリッヒ 2 世は戦争を繰返し、領土を拡大し、プロイセンを大発展させた人物である。それでフリードリッヒ大王と呼ばれている。啓蒙専制君主として有名であり、軍事のみならず哲学や音楽を良くする教養人であった。プロイセンは 1866 年にオーストリアを破り、1870 年にはフランスを破ったので、1871 年にオーストリアを排除したドイツ帝国（第 2 帝国）を建国し、プロイセン国王がドイツ皇帝を兼ねる事となった。プロイセンがドイツの代表国となったのはフリードリッヒ大王の活躍の御蔭であった。それでフリードリッヒ大王は歴代のプロイセン国王の中で最大の英雄とされてきた。

しかしドイツが第 2 次大戦に敗北してからは軍国主義

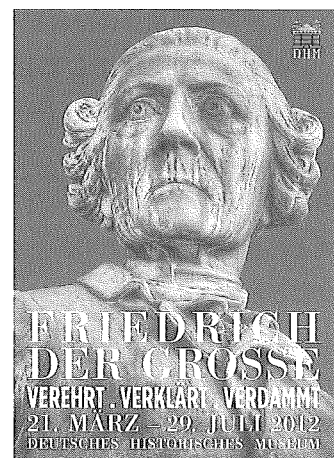


図11. 特別展ポスター、「崇拜され、美化され、非難されたフリードリッヒ大王」とある

を讀^たえる事は不可とされ、余り表に出る事は無かった。1990年のドイツ再統一直後に西独に疎開^{そかい}されていたフリードリッヒ大王の棺桶が大王の建設したベルリン郊外ポツダムのサン・スーシ宮殿（無憂宮）の前には移設埋葬^{まいそう}された際に話題となった程度であった。生誕300周年を迎え、ベルリンのドイツ歴史博物館で3月21日より7月29日まで特別展が開催されたが、今もフリードリッヒ大王の人気は高く、訪問者も多く、9月初旬まで1ヶ月以上も延長された。これもドイツ人の民族意識が強くなっている事実を示しているのだろう。

6) ホーネッカー生誕100年

エーリッヒ・ホーネッカーは東独最後の独裁者であった。前任者のヴァルター・ウルブリヒトの懷^{ふところ}刀^{がたな}として活躍し、1961年のベルリンの壁建設に際しては実施責任者として大活躍をした人物である。壁を越えて逃亡しようとした者への射殺命令を出してもいる。1912年8月25日西独のザール地方に生まれ屋根葺^かき職人をしてしたが、1930年にはドイツ共産党に入党した。共産党からモスクワの青年共産主義者学校に派遣され、ドイツに帰国してからは共産党の地下活動に従事した。秘密国家警察^{ゲシユタッポ}に逮捕され投獄されていたが、ソ連赤軍にベルリンが占領され、モスクワからウルブリヒト等の亡命共産主義者が帰国すると共産党幹部として迎えられた。共産党の下部組織として自由ドイツ青年団(FDJ)を組織する事で功績を上げ、共産党が社会民主党と合併したドイツ社会主義統一党(SED)の幹部として躍進^{やくしん}して行くのである。1953年にスターリンが死去し、ソ連共産党がスターリン主義を批判する様になると、ウルブリヒトの様な狂信的なスターリン主義者は邪魔^{じゃま}になり、ソ連のブレジネフ第一書記からウルブリヒトの後任者として選ばれたのがホーネッカーであった。1971年5月3日には陰謀によって宮廷革命を行い、ウルブリヒトを退任させ名誉職の党議長に任命し、自分は社会主義統一党(SED)第一書記に就任する。

以来東独の独裁者として18年に亘り政治の実権を握ったのである。歴史は繰り返す、とドイツの偉大な哲学者ヘーゲルが言ったが、マルクスはそれに加えて、1回目は悲劇として、2回目は喜劇として、と言った。これは正^{まさ}しくホーネッカーにも言えるのだ。ソ連のブレジネフの時代が去った後、しばらくして、ゴルバチョフの時代が始まった。資本主義との経済競争に敗北し、社会主義社会を根本的に変革しようと努力し続けたゴルバチョフにとって、ホーネッカーは頑迷固陋^{がんめいこうろう}な時代遅れの政治家に過ぎなかった。ゴルバチョフの改革政策に呼応して、東欧諸国にも民主化運動が始まる。東独でも官憲の力では抑えられない程の大規模なデモンストレーションが繰返され、最早^{もはや}ホーネッカー政権では支えきれない事が明らかになる。1989年10月18日には社会主義統一党政治局会議で宮廷クーデターが起こり、ホーネッカーは退陣を止むなくされた。この場合の首謀者も、ホーネッカーの腹心の部下と言われたエゴン・クレンツであった。自ら行った事が繰返されたのだ。しかし新指導部^{きようしうぶ}も狂瀾^{かえ}を既倒に反す事は出来ず、11月9日にはベルリンの壁が崩壊し、

事態は急速に進展し翌年の 10 月 3 日には東独は西独に併合されてしまうのである。

落魂^{らくはく}の身のホーネッカーは何ヶ月かキリスト教会に亡命した後、1991 年にはモスクワに向かい同地のチリ大使館に逃亡したが、1992 年にはベルリンに引渡され、東独時代の人権侵害の責任を問われ裁判に掛けられたが重病を理由に釈放され、一人娘や孫のいるチリの首都サンチャゴに逃れたが、1994 年 5 月 29 日に同地で死亡する。

2012 年 8 月 25 日はホーネッカーの 100 歳の誕生日に当たる為、ベルリン地方は因縁^{いんねん}浅からぬ地であるので、殆どの新聞が大きな記事を掲載した。現在のドイツの大統領も、首相も東独出身であるのは歴史の皮肉と言うべきであろう。



図12. ある分別のない男の栄達と没落、と題した8月25・26日版の新聞記事

7) ベルリンとウィーンの新空港建設工事

「中欧 2009 年夏」でベルリンの新空港が BBI 空港（ベルリン・ブランデンブルク国際空港）と言う名前で連邦政府と 2 つの邦政府（ベルリンとブランデンブルク）が共同して建設している事を報告した。出資比率はベルリン邦とブランデンブルク邦が各々 37%、連邦政府が 26% である。新空港のニックネームは西独首相とベルリン市長を務めたヴィリー・ブラントの名前を取ってヴィリー・ブラント・ベルリン・ブランデンブルク国際空港と決まった。本来は 2011 年 10 月 30 日に竣工の予定であった。それが 2012 年 6 月 3 日に延期された。筆者がベルリンに到着した 8 月 17 日には既に完成している筈であった。ところが、この期日は 2013 年 3 月 17 日に延期され、更に 2013 年 10 月 27 日にまで再延期されている。空港会社の監査役会議長を務めるのがベルリン市長で、ブランデンブルク邦首相が副議長だ。この延期に次ぐ延期については、ヴォーヴェライト・ベルリン市長の統制能力の不足の所為^{せい}だ。直ちに辞職せよとの圧力が日々強くなりつつある。それにしても何事も綿密なる計画を立て、完璧に仕上げるというドイツのイメージが全く裏切られてしまった。ドイツで何か社会を弱体化させるものが進捗しているのかも知れない。

ベルリンに比べるとウィーン空港の拡大工事が急速に進んでいた。筆者が初めてウィーンに着陸した 1979 年にはターミナルは現在の A ターミナルしかなかったが、80 年代には B ターミナルが完成、1993 年にはターミナル C、D が完成し近代的な大空港に脱皮した。ところが、

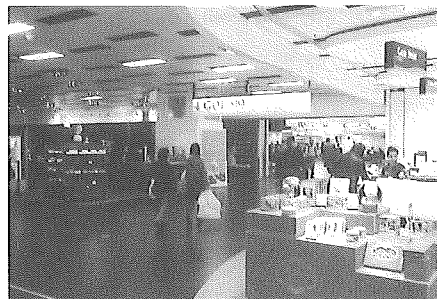


図13. ウィーンの新空港ビル内部

本年6月には新ターミナルE, F, Gが完成し、規模からいっても施設からいっても、どこにも負けない様な大空港に変身していた。筆者も非常に驚いた次第だ。ベルリン新空港建設が予定通り進捗せず、延期に次ぐ延期が続いているのとは誠に対照的であった。

8) ウィーンの街路名変更

1857年12月20日オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世はウィーン旧市街を取り囲む城壁を撤去し、壮大な大通を建設する事を決めた。火砲が発展し、城壁の意味がなくなった事と、ウィーンの市街地が城壁の外にまでは拡大してきたからであった。この大通はリング通りと呼ばれ、国会議事堂、市役所、宮廷歌劇場（現在は国立歌劇場）、宮廷劇場、ウィーン大学本館等々の華麗な建物が林立している。建築家を目指した若きヒトラーが感嘆し、絶賛した建築群である。

カール・ルエーガーは1897年から1910年に死亡するまでウィーン市長を務めた人物である。当時ユダヤ人に牛耳られていたウィーンをドイツ人の手に取戻そうとした人物である。ウィーン市長に選ばれた後もフランツ・ヨーゼフ1世皇帝はルエーガーの反ユダヤ的言動を嫌い何度も市長任命を拒否したのであるが、ルエーガーはドイツ人の間での人気が高く、最後には諦めて、いやいや市長に任命せざるをえなかった。

ルエーガーはユダヤ人に握られていた銀行を嫌い、ウィーン市の出資で貯蓄金庫を設立し対抗したりして、様々な施策を実施した名市長として知られている。映画『第三の男』や音楽家墓地で有名なウィーン中央墓地を郊外に建設したのもルエーガーだ。中央墓地の中心に位置する教会の地下がルエーガーの廟となっている。実に立派なものだ。ウィーン市内にはルエーガーの名前を付けた場所が20箇所以上あると言われている。

リング大通のうちルエーガーが市長を務めた市役所からウィーン大学までの区間がカール・ルエーガー博士リング（Dr.-Karl-Lueger-Ring）と名付けられていた。ところが、反ユダヤ主義者でヒトラーの思想にも影響を与えたルエーガーの名前をウィーン屈指の大通の名前にしておくのは^{まず}拙い。改名すべきだという意見が出ていた事は「中欧2010年夏」で述べたとおりだ。改名には賛否両論があり、熱い議論がなされたが、改名する事で決着し、2012年6月6日から大学リングという名前となった。ユダヤ勢力と反ユダヤ勢力の綱引でユダヤ勢力が勝利



図14. カール・ルエーガー博士広場の表示



図15. 上方に古い街路表示版を撤去した痕跡が残る大学リングの新街路名表示版

した次第だ。カール・ルエガーの名前を付けた他の場所の名前が今後どうなっていくのか、興味津々たるものがある。

9) ヘルマン記念像

ビスマルクのドイツ第2帝国はプロイセン王国やバイエルン王国、ザクセン王国等で構成される連邦国家であった。リッペは小さい侯爵領でありプロイセン王国に包囲されていたが、連邦を構成する1邦であった。ヴァイマル共和国の時代にも、第3帝国の時代にも独立を貫いたのであった。ところが、第2次大戦後は英国の占領地域となり、1947～48年に英国軍の命令で、1946年に成立したノルトライン・ヴェストファーレン邦に統合され姿を消したのである。リッペの首都は日本人留学生が多い音楽大学で有名なデットモルトであった。そのデットモルトの郊外の山の上に、建立当時は世界最大であったヘルマン記念像が聳え立っている。ヘルマンと言うのは9世紀にトイトブルクの森でローマ帝国の軍団を殲滅したゲルマンの英雄の事である。最近になって遺跡の発掘によって合戦の場所はこの記念像の場所からは若干離れた英軍基地内であった事が分かったが、この記念像が建設された1875年には、この場所だと信じられていた。

1875年と言うのは、1870年にドイツ・プロイセンがフランスを破り、翌1871年にパリ郊外ヴェルサイユ宮殿鏡の間でドイツ帝国(第2帝国)を建国して間もない時期であり、ドイツは敗戦国フランスの復讐を恐れている時期でもあった。ローマ軍団を同じラテン系のフランスに替え、ヘルマンが率いたゲルマン軍を新生ドイツ帝国に替え、フランスの進撃が有れば、ヘルマンがローマ軍団を殲滅した様に、撃滅してやるぞと言う意気を示すものであった。ヘルマン記念像はフランスへの敵愾心を鼓舞するのに用いられ、第1次世界大戦中には殆どのドイツ兵がヘルマン記念像の絵葉書を家族に送ったのだった。

ヘルマン記念像は1875年8月16日にドイツ皇帝ヴィルヘルム1世とリッペ侯レオポルト3世の参列の下に除幕されたのである。2人が並んで立った場所には記念の石碑が建っている。第3帝国時代にも愛国心鼓舞の為の聖地となっていた。

1945年ドイツは敗戦した。ヘルマン記念像は山上に聳

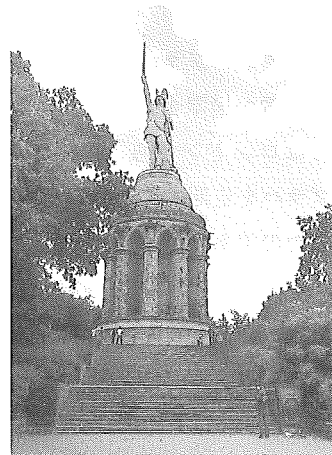


図16. ヘルマン記念像、人間と較べると巨大さが分かる

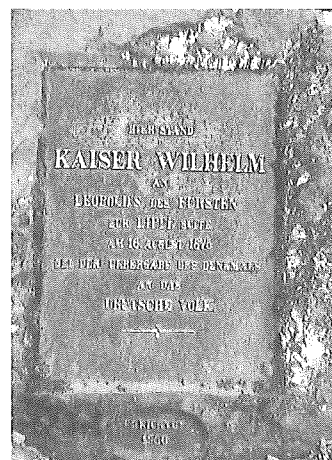


図17. 落成式にドイツ皇帝がリッペ侯と並んで立った場所の記念碑

え立ち恰好の目標であったので英国空軍の戦闘機に機銃掃射され、穴だらけとなった。更に、リッペ領は英国占領地となったので記念像はいつ撤去されてもおかしくない状況であった。同じ敗戦国でもドイツは日本とは違った。日本でなら記念像は即刻撤去された筈であったが、ドイツ人は撤去するどころか修復してしまった。現在では観光地として多数の人々が訪問し賑わっている。根底にはドイツ民族主義が死に絶えず現在も残っている証拠だろう。

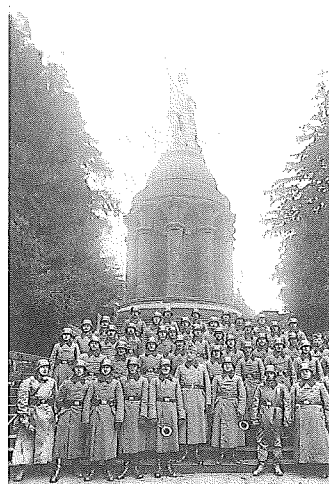


図18. 1939年演習の途中ヘルマン記念像の前で休憩するドイツ国防軍自動車隊将兵

10) 最近のプラハ

筆者が国際金融業務に従事していた、1980～1984年にはロンドンから、1990～1993年にはウィーンから、プラハを定期的に訪問して、大蔵省や中央銀行等を訪問したのであった。社会主義の時代と社会主義崩壊後の時代の両方を体験出来たのである。その後、ベルリンからウィーンまでを鉄道で移動する際には、いつもプラハを経由したのであるが、下車する事はなかった。大きな荷物を持って途中下車するのが面倒くさかったからだ。1993年にはチェコ・スロヴァキア連邦が解体され、チェコ共和国とスロヴァキア共和国に分離した。チェコ共和国はボヘミア地方とモラヴィア地方からなっている。昨年の夏にはウィーンから日帰りでモラヴィアの首府ブルノを訪問したのは、「中欧の夏 2011」で報告した通りだ。その際にブルノの変化を見て、また、追放されたドイツ人の一部がブルノに帰国しているのを見て、大いに驚いた次第だ。それで今度はプラハを訪問しようと決めた。プラハはウィーンから300kmの距離があり、新幹線が走っていないので、鉄道では片道3～4時間は掛かる。ウィーンからの日帰旅行には若干無理がある。それで今回は、ベルリンからウィーンへ鉄道で移動中途下車をした。

プラハ中央駅で下車し、早速ユーロをコルナに両替した。両替所からタクシーの表示が出ていたのでエレベーターに乗ってタクシー乗り場に行った。待っていたのは屋根にタクシーの標識を付けた正規のタクシーだ。ホテルは都心に所在して直ぐ近くではあるが、大きなスーツケースを持ては徒歩で移動する事は出来ない。運転手は都心に渋滞があったりしてタクシー料金が高くなる場合があるので、固定運賃でやりたい。400コルナだという。料金は高くなさそうだったので了承した。ホテルの前には駐車している自動車が何台かいたので、20メートル程離れた場所にタクシーは停まった。運転手はその場所からホテルの受付まで重いスーツケースを運んでくれた。400コルナを支払って別れた。領収証は貰わなかった。そこまでは良かった。ところが受付の横には大きな掲示が出ていた。運賃の不正請求をするタクシーが後を絶たないので、必ず領収証を貰う様にと書いてあっ

た。受付で中央駅までの車代は幾らか尋ねた。ホテル指定のハイヤーで 150 コルナだという。タクシーなら精々 100 コルナ程度だろう。やられたと気が付いたが遅かった。2 泊してホテルを出る際に立派なハイヤーで中央駅に移動したが料金は確かに 150 コルナであったし、運転手のサービスも良かった。バルカン諸国は社会主義になる前に資本主義が成立していなかったの、資本主義とはインチキをして金を儲ける事だと言う意識が強く、資本主義経済が中々定着しないのであるが、チェコはハプスブルク帝国の中で最も資本主義経済が発達していた地方であったのに、この様なぶったくりタクシーがいたのは少し意外であった。

プラハの街はすっかり変わっていた。中央銀行であって、筆者が何時も訪問していたチェコスロヴァキア国立銀行の看板はチェコ国立銀行と変わってはいたが、建物はそのままであった。しかし、その周辺は全く変わっていた。昔は薄暗い建物が続く街だったのに、様々な商店が並び、道路も歩行者専用道路となっている。多数の人々が歩き、非常に賑やかである。大型ショッピング・センターが都心に幾つか所在して、夜の 10 時まで営業している。吃驚した次第だ。時計台広場もレストランやカフェに囲まれ華やかだ。そこから、80 年代にも 90 年代にも筆者が定宿とした、当時プラハで一番のホテルだったブルタバ河畔のプラハ・インターコンチネンタル・ホテルに向かった。時計台広場から歩いて 5 分ほどの通路には以前は全く店が無かったのに、今ではエルメスとかプラダとかのブランド・ショップが並んでいる。すっかりさま変わりだ。しかし懐かしいホテルはそのまま残っていた。中に入ってロビーでお茶を飲んだ。ロビーは社会主義時代には夜は娼婦たちによって占拠され、居室にいと誘いの電話が次々と掛けて来て、うるさくて迷惑したものだったが、流石に今はそう言う事はなさそうだ。

夕刻になったのでホテルを出て時計台広場に戻り夕食を取ろうとした。1 軒のレストランは満員で空いたテーブルがない。隣のレストランは何故か半分くらいは空いている。その空いている方のレストランで食事をした。ヨーロッパの夏には広場の一部を占拠した野外レストランが多い。広場の雑踏を眺めながらゆったりと食事を摂った。隣のテーブルには中年のイスラエル人が座り、コールガールらしい若いチェコ女性と大声の英語で話し続けている。これには若干辟易としたが、食事を終えて支払

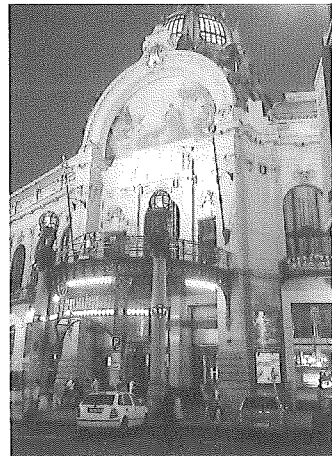


図19. プラハ都心のショッピング・センターの外観

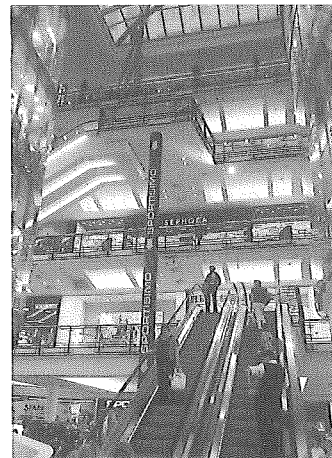


図20. プラハ都心のショッピング・センターの内部

をしようとした。1人分が100ユーロ程度もする。そんなに美味しい食事でもなかったのが高すぎると思った。相場の2〜3倍だろう。給仕に少し高すぎるのではないかと尋ねると、テーブル・チャージが入っているからだと言う。仕方が無いので請求額を支払った。恐らく地元の人たちにはぶったくりレストランとして有名なのだろう。それで隣のレストランが満員であったのに、こちらのレストランは半分くらいしか客がいなかったのであろう。その理由がはっきりとした次第だ。資本主義経済ではインチキで利潤を獲得するのではない。正々堂々と商売を行い利潤を得るシステムである。チェコの現状はそれに程遠いのではないかと思わせた。

プラハから鉄道で更にウィーンに移動する事とし、プラハ中央駅に向かった。ドイツ・オーストリアを中心とする中欧諸国の鉄道駅構内には、至る所に黄色の発車時刻表と白色の到着時刻表が掲示されており、列車の経過駅や出発・到着のプラットフォーム番号等の詳しい情報を入手できる。昨年のブルノ駅はそうであったし、以前のプラハ駅もそうであった。ところがプラハ駅は大改装され時刻表が消えてしまった。地下の待合広場に液晶板が表示され15分くらい前にプラットフォームが表示される。乗客は急いで自分のプラットフォームに急ぐ。これはフランスや英国の鉄道駅のシステムである。空港のボーディング・ゲートの表示もまたそうである。中欧の時刻表に慣れた身には甚^{はなは}だ不便である。とにかく番号が表示されたのでプラットフォームに向かった。筆者は一応1等車の切符を持っていたのであるが、1等車が前方に来るのか、後方に来るのかさえも分からない。合理化の所為^{せい}かプラットフォームに駅員もいない。中欧の鉄道駅には通常は列車構成表がプラットフォーム掲示されていて自分の予約した車両がどの位置に来るのか分かる。プラハ中央駅はこの良き伝統を総て無くしてしまったのだ。残念であった。1等車は前方だと叫んで移動する乗客がいたので、その情報が正しいのか否かの保証は全くなかったが、自分も移動した。幸いにして無事1等車に乗る事が出来た。それにしても、中欧のチェコが中欧の良き伝統を捨てるのは何故だろう。また、ドイツ語が通用せず、英語オンリーなのも気になった。ドイツに対する反感がそんなにも大きいのだろうか。



図21. プラハ中央駅地下待合広場の列車情報

Mitteuropäischer Sommer 2012

Hajimu WATANABE

College of Science and Industrial Technology

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashikishi, Okayama, 712-8505 Japan

(Received October 1, 2012)

Im Oktober 2011 habe ich endlich die japanische Übersetzung des Tagebuches von Thronfolger Erzherzog Franz Ferdinand über seinen Besuch zu Japan (1893) publiziert. Bevor ich diese Arbeit anfang, besuchte ich Schloß Artstetten, in dessen Gruft der Sarg des Thronfolgers liegt. Ich hatte die Schloßherrinn getroffen, Fürstin von Hohenberg, eine Urenkelin vom Thronfolger, die im Schloß wohnt, um über mein Projekt zu berichten und ihre Unterstützung dafür zu ersuchen. Seitdem ist einige Zeit vergangen. Deshalb dachte ich, daß es jetzt unbedingt angebracht sei, ihr persönlich ein Exemplar dieser Publikation zu überreichen, statt auf dem Postweg.

Glücklicherweise konnte ich in diesem Sommer Österreich wieder besuchen. Erfolgreich konnte ich einen Termin bei der Fürstin vereinbaren und ihr Anfang September 2012 im Schloß persönlich ein Exemplar meiner Übersetzung übergeben. Die Fürstin war sichtbar erfreut, und mir war es eine Ehre, einen japanischen Grünen Tee von der Fürstin selbst eingeschenkt zu bekommen und nach dem Treffen von der Fürstin in ihrem eigenen Auto zum Bahnhof Pöchlarn gebracht worden zu sein.

Ich war sehr glücklich und mir der Bedeutung meiner Übersetzung sicher.